

# 平成二十九年 第十一期くまもと俳句ポスト

## 第十一期開函

俳誌「霏霏」主宰 星永 文夫 選

## 特選

肥後椿八雲の「時」を伝え継ぐ 北海道札幌市 水野亜希

## 【講評】

小泉八雲がこの地の五高に講師として赴任して来たのは明治二十四年。滞在したのはわずか二年余だが、その間、学生への〈薫陶〉はもちろん、『知られぬ日本の面影』等の著作を残すなど、その業績は今もこの地で語り継がれている。作者はそのすべてを含めて「八雲の『時』」という。これは今も残る小泉八雲熊本旧居に佇<sup>た</sup>つての感懷であろう。肥後六花の一〈肥後椿〉にその面影を重ねて。

## わが輩通り賞

子規の伊予漱石の肥後夏蜜柑 熊本県熊本市 鶴田信吾

## 入選

葉桜や地震<sup>ない</sup>の障りの残る肥後 大阪府泉大津市 山田佳音  
菜の花や特急通過の田原坂 長崎県諫早市 麻生勝行  
漱石も訪ひし古書店枇杷の花 熊本県熊本市 森本尚子

## 佳作

戦いの義は朽ちはてて露と消え 福岡県久留米市 山口洋  
田原坂さつきの果ての弾の跡 佐賀県基山町 明石穰  
風光る汀女が句碑の磨かれて 熊本県熊本市 野崎一雄  
漱石の句碑のほとりや犬ふぐり 熊本県熊本市 阿部章  
御廟所守る詰所に匂ふ蚊遣香 熊本県熊本市 山崎綾子  
カルデラは大水瓶や男梅雨 熊本県熊本市 佐藤誠吾  
梅雨湿りたる漱石の像を撫づ 熊本県熊本市 坂口美穂子  
本妙寺かげろふの中僧の声 熊本県熊本市 菊池一郎  
弾痕のあと生生し花の冷え 福岡県福岡市 山下美知子  
記念館床をよちよち冬の蠅 熊本県熊本市 末次直人

投句総数 一九九句

市外 九七句

市内 一〇二句

開函日 平成二十九年六月三十日

# 平成二十九年 第十二期くまもと俳句ポスト

## 第十二期開函

日本伝統俳句協会理事 岩岡 中正 選

## 特選

おおい

大地震の亀裂あらはな刈田かな

熊本県熊本市

野崎一雄

## 【講評】

一昨年の熊本地震である。稲が実っている間にはつきりしなかったが、稲を刈って刈田となると、こんなに大きな亀裂が走っていたのかと、あらためて驚き、再びあのときの恐怖がよみがえったのである。くつきりと深く大きい亀裂が印象的で、対象を瞬時に把握した、力強い写生句である。熊本地震からもうすぐ三年目だが、亡くなった方たちのご冥福をお祈りするとともに、今も仮設住宅に住む方たちをはじめ多くの被災者の方たちに心からお見舞いを申し上げたい。

## わが輩通り賞

活断層走る大地や麦の秋

熊本県熊本市

森本尚子

## 入選

犬好きのことは知らざり漱石忌  
熊本の八雲旧居に祭笛  
火の国は水のまほろば汀女の忌

熊本県熊本市  
宮城県仙台市  
熊本県熊本市

光永忠夫  
西澤勝  
山崎綾子

## 佳作

阿蘇の風スマートフォンに初尾花  
里泊り囲む夕餉のずるき汁  
田原坂戦の色の彼岸花  
本妙寺巨大山門秋の空  
ねえあにちやんちいちいぜみがないてるよ  
秋灯の裸電球旧居かな  
柿熟れて空にとけたり田原坂  
草枕旅の湯船に冬陽射す  
残暑でも水が綺麗な水前寺  
こわれたるくまものしろ秋の風

熊本県山鹿市  
熊本県熊本市  
長崎県諫早市  
熊本県熊本市  
熊本県熊本市  
神奈川県川崎市  
神奈川県相模原市  
京都府京都市  
東京都江戸川区  
熊本県熊本市

松尾光浩  
佐藤誠吾  
麻生勝行  
菊池一郎  
たかだよしゆき  
松原賀寿子  
矢澤孝二  
河野晴江  
岡田悠花  
とくながここ

投句総数

二三八句

市外

一二六句

市内

一〇二句

開函日 平成二十九年十二月三十一日

平成三十年 第十三期くまもと俳句ポスト

第十三期開函

日本伝統俳句協会評議員 井芹 眞一郎 選

特選

復活の鯨しやちのかがやく立夏りつかかな

熊本県熊本市

野崎一雄

【講評】

四月二十八日、地震で落下した熊本城の鯨が二年振りに完成して天守閣に輝き、見物客からは一斉に歓声が上がった。山々には若葉が満ちて明るく夏の到来を感じさせる季節に相応しい「立夏」の季題を生かして作者の前向きな心情がうまく語られている。

わが輩通り賞

いにしえの戦の跡や寒椿

福岡県久留米市

中村英之

入選

冬ざれの語り継がれし田原坂  
大阿蘇の風を束ねて野火猛る  
水満ちて桜のうつる水前寺

福岡県小郡市  
熊本県熊本市  
千葉県松戸市

中村美由紀  
佐藤誠吾  
田中昌子

佳作

風鈴や安政町に八雲立つ  
震災地肥後芍薬が癒しけり  
街角に小楠の碑や風薫る  
紅梅や水前寺富士立上がる  
手水舎の新緑掬ふ柄杓かな  
田原坂桜に秘むる歴史あり  
大観峰雲海望む阿蘇の空  
漱石の足あとたどる水前寺  
句碑ひとつ釣耕園の青葉闇  
漱石居明治を語る夏木立

熊本県熊本市  
熊本県熊本市  
熊本県熊本市  
熊本県熊本市  
熊本県熊本市  
熊本県熊本市  
大阪府豊中市  
福岡県北九州市  
熊本県熊本市  
熊本県熊本市

尾野会厘  
林良章  
平川礁舎  
福原博  
鶴田信吾  
久光有子  
吉田昂平  
楠根はるえ  
坂口美穂子  
山崎綾子

投句総数 二七一句

市外 一三二句

市内 一三九句

開函日 平成三十年六月三十日

# 平成三十年 第十四期くまもと俳句ポスト

## 第十四期開函

俳誌「霏霏」主宰 星永 文夫 選

### 特選

陽は強しハーン先生昼寝の間

東京都品川区 阿久津桂子

### 【講評】

「ハーン先生」とは、明治二十四年（一八九二）、第五高等学校に転任のため、山陰の松江から熊本に転居した小泉八雲のことである。転住の因の一として、生来寒さに弱い体質があったという。その点熊本は「陽は強し」の地、住みよい所であったと思う。その折の旧居の一つが八雲記念館（熊本市安政町）として、今も保存されている。

この句はそこを訪ねての作であろう。そこで昼寝のハーン先生の面影を偲んだのである。〈ハーン大先生はきつと今も夢に、古きよき日本の文明を追っておられるのではないか〉、などと思いつながら、『知られぬ日本の面影』や『東の国から』『心』などの名作は、この地で生まれているのである。

ひとときハーン先生に思いを馳せた自らを、褒めながら照れながら、少々大仰に詠んだところがおもしろい。

### わが輩通り賞

正義とは哀しき夏の田原坂

熊本県阿蘇郡南阿蘇村 横尾富喜子

### 入選

花芙蓉八雲通りの風の中  
負けて聴く校歌夕焼の藤崎台  
降りしきる冬誘う雨田原坂

熊本県熊本市 平川礁舎  
熊本県熊本市 野崎一雄  
熊本県熊本市 平川一美

### 佳作

夕立や火砲の音か田原坂  
紅梅のガラシヤのごとく散りにけり  
唐諸は活断層の夢を見る

大分県中津市 安倍方恵  
兵庫県神戸市 藤井隆人  
熊本県山鹿市 松尾光浩

武士の終焉を告げる田原坂

長崎県佐世保市 長嶋宏

大地震の城は語り部寒椿  
崩落の城垣照らす夜々の月  
薪能次第第に雨となり  
風渡る漱石邸の蚊やりかな  
たばるさかあめがふつてもいいけしき  
くまもとと一緒にはぐくむ平和の日

熊本県熊本市 佐藤誠吾  
熊本県熊本市 山崎綾子  
熊本県熊本市 西田光子  
千葉県流山市 田邨圭脩  
福岡県久留米市 笠未怜  
福岡県福岡市 森田香織

投句総数 一八〇句

市外 一二句

市内 六八句

開函日 平成三十年十二月三十一日

# 令和元年 第十五期くまもと俳句ポスト

## 第十五期開函

日本伝統俳句協会副会長 岩岡 中正 選

## 特選

避難所のむすびの記憶木下闇 こしたやみ

熊本県熊本市

野崎一雄

## 【講評】

もう三年もたったあの熊本大地震。今なお仮設住宅住まいの人たちもいるが、今でも茂った夏木立の下闇に入ると、あの震災の苦労がおむすびの白の一点からよみがえるという。たしかな記憶を基にした物語性と詩情がある。

## わが輩通り賞

カルデラは逆さ五岳の植田かな うえた

熊本県熊本市

佐藤誠吾

## 入選

涅槃西風水俣湾はわが浄土 ねはんにし

熊本県熊本市

鶴田信吾

くまもんの帽子で乗車麦の秋

長崎県諫早市

麻生勝行

太陽の一欠片なり冬の鷺 ひとかけら さぎ

東京都練馬区

三嶋浩樹

## 佳作

山は生きてゐるそこにも 薇 ぜんまい ここにも薇

熊本県熊本市

倉岡皇至

新緑に囲まれて今田原坂

福岡県北九州市

小宮直子

春日傘たゝみ八雲の旧居訪ふ はるひがさ

熊本県熊本市

野口美智子

神と医師信じよと初みくじかな

熊本県合志市

坂田美代子

満開の桜のごとく散る命

熊本県菊池市

太田琴乃

老鶯なく峠の茶屋は今日も留守 ろうおう

熊本県熊本市

林田秀久

田原坂はるかにみどりの山野あり

高知県南国市

山崎信秀

桜はらはら義を貫きし古戦場

熊本県熊本市

熊谷尚子

阿蘇に咲く野の花散らし紙を漉く

熊本県熊本市

山崎綾子

春雨や弾痕濡るる田原坂

埼玉県川口市

井上裕太

投句総数 二百十一句

市外 百二十六句

市内 八十五句

開函日 令和元年六月三十日

# 令和元年 第十六期くまもと俳句ポスト

第十六期開函

日本伝統俳句協会評議員 井芹 眞一郎 選

特選

夏草や南州無念の田原坂  
柳田 孝裕

【講評】

明治初期、政府の近代化に抗して士族の反乱が起こる。西郷隆盛（南州）を盟主として官軍側との激戦が繰り広げられるが、特に田原坂での戦いは熾烈を極めた。今でも毎年慰霊祭が行われている。

掲句は「夏草」の季題をとおして日本国内最後の内戦が語られた。

わが輩通り賞

復活の城の開門菊日和  
熊本県熊本市 野崎 一雄

入選

水音の細きを辿る芭蕉林  
熊本県熊本市 廣瀬 守世

球磨川の船旅終へて秋惜しむ  
熊本県熊本市 山崎 綾子

漱石の坐りし縁に秋日さす  
福岡県小郡市 中野 智津恵

佳作

晩秋の藁屋根重き伝授の間  
熊本県熊本市 鶴田 信吾

麦の芽の風の中なる父母の墓  
熊本県熊本市 粟津 玲子

蟬時雨楠の木陰の美少年  
福岡県北九州市 仙波 数海

田原坂戦のあとや冬隣  
山梨県南都留郡西桂町 梶原 真弓

武者返しふくらんでくる空つ風  
熊本県熊本市 佐藤 誠吾

水清き釣耕園や冬木の芽  
熊本県熊本市 坂口 美穂子

くまもんの郷里の山も粧へり  
長崎県諫早市 麻生 勝行

春の日に君と歩いた田原坂  
熊本県宇土市 佐藤 未和子

落ち葉ちる赤や黄色がうつくしい  
熊本県熊本市 くらだ りく

投句総数 百四十六句

市外 百句

市内 四十六句

開函日 令和元年十二月三十一日

## 令和二年 第十七期くまもと俳句ポスト

第十七期開函

日本伝統俳句協会評議員 井芹 眞一郎 選

特選

城垣は復興半ば梅雨に入る

熊本県熊本市

山崎 綾子

【講評】

2016年（平成二十八年）の地震で大きな被害を受けた熊本城。地震以来4年になるが修復はまだ初期段階である。二十年以上の歳月を要すると言われている。掲句は、その復興途中の崩れている城垣を仰ぎながら梅雨の時期に入る不安を抱かれたのであろう。

わが輩通り賞

小鴨翔つ水輪に淡き影残し

熊本県熊本市

鶴田 信吾

入選

参勤の通ひし旅所石路咲けり

熊本県熊本市

後藤 博文

淑氣満つ法華太鼓や本妙寺

熊本県熊本市

菊池 一郎

解禁の空の回遊城は夏

熊本県熊本市

野崎 一雄

佳作

城垣にしがみつきたる草紅葉

鹿児島県薩摩仙台市

春田 眞未子

投句総数 八十三句

市外 十句

市内 七十三句

開函日 令和元年六月末日

## 令和二年 第十八期くまもと俳句ポスト

### 第十八期開函

日本伝統俳句協会副会長 岩岡 中正 選

特選

四時軒の失意を包む春日かな

熊本県熊本市

柳田 孝裕

### 【講評】

幕末の最大の思想家のひとりの横井小楠の旧居・四時軒を訪れた作者。今も豊かな春の日射しと自然の中で、地元の熊本藩の外では高く評価されていたのに藩内では厳しい扱いを受けていた小楠の「失意」を詠んだ句。しかしそれにもめげない意気軒昂な小楠。「失意を包む春日かな」と歴史をよく学んだ上で詩情豊かに詠まれた佳句です。

わが輩通り賞

八千代座に海老蔵来たる秋日和

熊本県熊本市

鶴田 信吾

入選

寂しさや能楽堂に冬の鳥

熊本県熊本市

梶山 純子

紅葉がくまもんほっぺをおもわせる

熊本県山鹿市

大坂 たかひろ

主なき八雲旧居や秋の声

熊本県熊本市

後藤 博文

佳作

文机に秋日差しをり八雲邸

岐阜県大垣市

高瀬 寿美江

名園の枯芝といふ柔らかさ

熊本県熊本市

西村 孝子

石を抱く走り根太し漱石忌

熊本県熊本市

轟 眞理子

色鳥や能楽堂に日の零る

熊本県熊本市

堀地 久美子

せみ時雨武蔵も聞きし靈巖洞

東京都国立市

阿部 修治

楠若葉巨大山門本妙寺

熊本県熊本市

菊池 一郎

鳥の啼く三賢堂や竹の春

熊本県熊本市

坂口 美穂子



八雲邸しとど降る雨石路の花

兵庫県洲本市

渡辺 幸子

春光やガラスに映る八雲像

茨城県取手市

石塚 灯舟

鴨鳴きて鯉口開ける水前寺

熊本県熊本市

三隅 康資

投句総数 百四句

市外 二十一句

市内 八十三句

開函日 令和二年十二月三十一日

## 令和三年 第十九期くまもと俳句ポスト

第十九期開函

日本伝統俳句協会副会長 岩岡 中正 選

特選

春塵を浴びてさびしき肖像画

大分県大分市

小野 智輔

【講評】

他の投句から推定すると「八雲旧居」の句で、八雲の肖像画の写生句です。薄く「春塵」がかかった肖像画を通して、生涯どこか淋しげだった八雲の内面までよくとらえた俳句です。生涯自分の心の故郷を追い続けた八雲の思いにふれた句で、「春塵」つまり「春の塵」という、どこか人の世の塵や人生そのものを連想させる季語がよく生かされた句です。「浴びてさびしき」は、旅する作者の思いでもあったのです。

わが輩通り賞

水前寺加勢<sup>かせいた</sup>以多香る小春かな

熊本県熊本市

佐藤 誠吾

入選

平成はするりとぬけて椿落つ

熊本県芦北郡芦北町

田口 澄也

初みくじ末<sup>たの</sup>を待みに結びけり

熊本県合志市

坂田 美代子

冬の庭古今伝授の虚<sup>まじ</sup>と真

宮崎県宮崎市

高妻 能世

佳作

秋高し城を要の肥後の街

熊本県熊本市

山崎 綾子

肥後椿少しふくらむ群すずめ

兵庫県豊岡市

澁谷 義人

コロナ禍に沈む世の中花曇

熊本県熊本市

野口 美智子

水面<sup>みなも</sup>のしらさぎさざ波と春眠

熊本県熊本市

上田 将大

向こう山打ち合う銃弾赤とんぼ

熊本県合志市

太田 行雄

葉桜の長き参道本妙寺

熊本県熊本市

坂口 美穂子

二句ばかり奉納の秋本妙寺

熊本県熊本市

菊池 一郎

小春日を一人占めして舟漕ぐ人

熊本県熊本市

鶴田 信吾

雨蛙鳴くよ皆でノーマスク

大阪府大阪市

横瀬 わかな

舌打ちの音を呑み込むマスクかな

熊本県合志市

大木 歌子

投句総数 百十三句

市内 五十六句

市外 五十七句

開函日 令和三年六月三十日

# 令和三年 第二十期くまもと俳句ポスト

## 第二十期開函

日本伝統俳句協会副会長 岩岡 中正 選

## 特選

城裏の笹子の径となりけり

熊本県熊本市

山崎 綾子

## 【講評】

「笹子」は、「笹鳴き」ともいって、冬の鶯のこと。冬は山中から里の藪へ下りてきて「チャツチャツ」と鳴きます。作者は四季折り折りのお城を訪ねているのでしよう。耳ざとく笹子のかわいい声に足をとめている姿が目に見える、静かな一句です。

## わが輩通り賞

蕎麦刈や阿蘇はのさりの里日和

熊本県熊本市

佐藤 誠吾

## 入選

秋晴れにつづみうちたる音高し

熊本県熊本市

西田 光子

日当れば八雲の居間に冬の蠅

熊本県熊本市

芥川 卓

激戦を偲ぶ紅葉の田原坂

熊本県熊本市

三隅 康資

## 佳作

炎昼の光さざめく水面かな

大阪府堺市

宮崎 智蔵

真つ直ぐに真つ直ぐに行く神の旅

熊本県熊本市

鶴田 信吾

金木せいほのかに香るコーヒー店

熊本県熊本市

佐藤 琢朗

鎮もれる三賢堂の散紅葉

熊本県熊本市

坂口 美穂子

投句総数 六十七句

市内 四十四句

市外 二十三句

開函日 令和三年十二月三十一日